



Title	日本図書館史研究の特質 最近10年間の文献整理と その検討を通じて
Author(s)	三浦, 太郎
Citation	明治大学図書館情報学研究会紀要, 3: 34-42
URL	http://hdl.handle.net/10291/11539
Rights	
Issue Date	2012-03
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

< 論文 >

日本図書館史研究の特質 —最近 10 年間の文献整理とその検討を通じて—

三浦 太郎

本稿の目的は、日本図書館史に関する研究の文献調査を行い、その整理・検討を通じて今日の研究動向を明らかにすることにある。研究への着目の柱として、(1) 図書館史研究の方法論的な問い直し、(2) 日本の戦後図書館史の位置づけ、(3) 人物への注目という3つの観点を中心に述べる。日本図書館史研究では、批判的な歴史認識が問い直され、人物研究をはじめとして、インタビューや一次文書の探求・活用が求められる時期を迎えている。

はじめに

近年、日本における図書館史研究には顕著な特色が3つある。それは、(1) 図書館史研究を方法論的に問い直す試み、(2) 戦後日本の図書館に対する歴史的評価、そして、(3) 人物への注目である。

2008年(平成20)に図書館法が改正され、公共図書館の位置づけが捉え返された。しかし、それより以前1990年代以降、公的サービスの見直しや法制度の変革、利用者構造の変化など、図書館が大きな転換を求められるようになる中で、その存立基盤が歴史的に問い直されるようになっていく。図書館発展の来し方が改めて議論され、とくに現代と直に結びついた戦後の展開への注目が高まっている。さらに、戦後図書館の内部で現実にサービスを担った人びとの役割が見直されて人物研究が活発化し、これが歴史文書・文献の総合的な解釈を土台とした人物史研究につながっていると考えられる¹⁾。

本稿では、以下、過去10年間(2002~11年)に国内で発表された図書館史関係文献を対象に、上記3つの特色に沿って研究成果を見ていく。日本で図書館史を専門に研究する団体に日本図書館文化史研究会があり、その機関誌として『図書館文化史研究』が発行されているが、この研究会の活動成果をはじめ

め、日本図書館情報学会、日本図書館研究会、日本図書館協会など、国内主要団体から刊行・発表された成果を中心に取り上げる。主として、日本を論述対象とした研究を見ていくが、館種や時代はとくに限定しない。また、書誌学、歴史学、教育学などの隣接領域の関連研究については原則含めていない。

1. 図書館史研究とは何かを問い直す

今日、図書館は変革期の只中にあると言われる。公共性の是非、経営状況の変化、新たなサービス理念の展開といった現代的課題が論じられる中で、図書館史研究の分野においても、そもそも「図書館とは何か」という問いに立ち返り、図書館史研究を方法論的に再構築しようとする試みが見られている。

日本図書館文化史研究会が旧称図書館史研究会の発足から20周年を迎えた2002年(平成14)9月、「図書館文化史研究の回顧と展望」と題するシンポジウムが開催された²⁾。この中で、『日本近代公共図書館史の研究』(1972)を著すなど図書館史研究の第一線で活躍してきた石井敦は、戦後図書館史研究の動向を振り返り、1950年代に『図書館雑誌』に「図書館史の方法」が取り上げられたことを端緒にし、日本の図書館史研究がようやく出発点に立ったと述べている。石井は図書館の本質やあるべき姿を、歴史を通して浮かび上がらせる態度を強調した。

また、同じくパネリストのひとり岩猿敏生は、図書館史の捉え方を示す時代区分に着目し、一般史の

2012年2月10日受理

みうら たろう 明治大学文学部

区分とは異なる図書館史の時代区分を提唱した。岩猿は、先行する武居権内、小野則秋らの論を批判的に継承しつつ、図書文化の担い手という観点から、貴族文庫時代・僧侶（寺院）文庫時代・武家文庫時代・市民図書館時代の4つに分けた。社会科学として図書館学を位置づける際、図書館の本質を歴史的に探究することは不可欠であるが、従来はその理論的枠組みへの考察が少なかったことへの反省に立つものであった。その後、この時代区分をもとに岩猿は『日本図書館史概説』（2007）を発表し、個別の図書館事象に通底する時代背景を通史的に描いた³⁾。

2004年（平成16）には、大著『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』（1987）などの成果を発表していた河井弘志が、主としてドイツの図書館史研究の系譜を追いながら、その領域が図書館の発生史・制度史・運動史、さらに図書館に関する理論の歴史（図書館学史）、思想の歴史（図書館思想史）に及ぶと論じた⁴⁾。このうち思想の歴史に関しては、抽象度の高い体系・理論の歴史的展開をたどる教義史、ひとつの文化圏や時代に特定される考え方の過程を研究する観念史、一時代の精神的全体構造を総合的に幅広く捉える精神史などの思想史的な系譜があることを前提としながら、それと異なる社会的な視点を持ち込む必要性を主張している。河井は、図書館思想が個々の図書館員にとって、よりよいサービス実践を追求するための指導理念でなければならない旨を主張した。

2007年（平成19）7月には日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「エビデンスベーストアプローチによる図書館情報学研究の確立」（研究代表者・上田修一）の一環として「図書館史研究にとってエビデンスとは何か？」と題するワークショップが開催された。これは図書館情報学領域における証左の確かさを検証する試みの一環として、図書館史研究における論証基盤を問い直す試みであったが、その中で筆者が日本の図書館史研究の概況を報告し、小黒浩司はオーラルヒストリーのような実体験に根ざす研究手法の有用性を指摘した⁵⁾。

さらに2009年（平成21）には、奥泉和久が『近代日本公共図書館年表1887-2005』を編纂・上梓した⁶⁾。これは日本の近代公共図書館に関する総合年表としては初めての成果であり、「年表論」的視座から図書館史研究の捉え返しを試みたものである。奥泉は、単に事項を年代順に並べるにとどまらず、2,276に及ぶ典拠文献に掲載された事項を抜き出し

て整理し、異同の確認を行った上で時系列に掲載した。典拠文献には、公共・大学・学校など各館種の図書館で刊行された図書館史や年報類をはじめ、研究論文・記事、自治体史、大学史、学校史、教育史、地方新聞記事や、文書館所蔵の公文書など多様な情報源が含まれ、歴史的事項は「公共図書館」「図書館界」「一般事項」の3つに分けて並置された。さながら本年表は、近代日本公共図書館史に関する歴史事典・書誌の役割を果たすものと言うことができ、日本の公共図書館の史的展開を描き出すことに成功している。

奥泉はまた、図書館史研究の問題の所在を論じる中で、歴史研究に取り組むにあたっては、“社会が変化するなか、地域の人びとに対して図書館がどのようなサービスを利用者に提供してきたのか、図書館員が自ら史料を選択し、批判的に向き合い、解釈や評価の妥当性を検証する姿勢こそが求められる”と、批判的な歴史認識の重要性を強調した⁷⁾。

2. 戦後日本の図書館評価

2.1 『中小レポート』と『市民の図書館』

図書館史研究の方法論的な問い直しと並行し、戦後公共図書館の活動指針として位置づけられている『中小都市における公共図書館の運営』（いわゆる『中小レポート』）（1963）や『市民の図書館』（1970）で推進されてきた戦後の図書館サービス実践について、歴史的に評価しようとする機運も高まりを見せている。現在の図書館像が形成される経緯に対する問いかけから、戦後日本の図書館評価が試みられるようになったのである。

2004年（平成16）には『図書館界』56巻3号誌上で「現代社会において公立図書館の果たすべき役割は何か」と題する誌上討論が行われ、『市民の図書館』に対する歴史的な評価が試みられたほか、同年秋には日本図書館文化史研究会の主催で「戦後公共図書館実践の再検証」と題するシンポジウムが開かれた⁸⁾。

この中で、現在日本図書館協会理事長として館界を牽引する塩見昇は、戦後を4時期に区分し、敗戦から1950年代までを各図書館の「サービス摸索期」（第1期）、続く1960年代から70年代初期を、人びとの求めに応じて資料を提供する「活動指針の発見と共有期」（第2期）、さらに1970年代後半から80年代前半の時期を住民の声が顕在化した「図書館

づくりの進展の時期」(第3期), それ以降を「低成長下の図書館づくり」(第4期)に分けている。このうち第2期と第3期を画する『中小レポート』や『市民の図書館』の刊行を通じて, 図書館の貸出利用が一般化し, 住民の自主的な学びを保障する場として図書館が位置づけられた点を評価した。

2006年(平成18)には『公共図書館サービス・運動の歴史』が刊行された^{9,10}。ここでは先行研究・資料を網羅的に踏まえつつ, 2巻全13章の中に古代から現代までの図書館史が通覧されている。時代区分は, 明治新政府の樹立以前を「前近代」, それ以降, 戦後を迎えるまでを「近代」, 1945年(昭和20)8月以後を「現代」と大きく分けるが, 近現代に比重が置かれ, とりわけ, 第7章以降で戦後日本の公共図書館史を描き出していることに特色がある。

著者ら(小川徹, 奥泉, 小黒)はオーラルヒストリー研究会の主要メンバーとして, すでに『「中小都市における公共図書館の運営」の成立とその時代』(1998)を上梓していたが, この成果を踏まえ, 1960年代当時の図書館運動の中で『中小レポート』という活動指針の登場した経緯を考察している。さらに, 貸出とレファレンスサービスの機能を推進した日野市立図書館の実践を経て, 図書館が住民に開かれたサービスを提供する新しい時代の幕が開いたことを論じた。また『市民の図書館』において, サービス対象に都市住民としての市民個人が浮かび上がった点も指摘している。本書は現代史上の事柄に対する歴史的評価には慎重な姿勢をとりながらも, 地域・家庭文庫や市民運動の展開など, 図書館と住民との関係性にも着目しており, 戦後図書館史の流れを理解する好著となっている。

他方, 『図書館界』誌上の一連の議論を検討する中で, 山口源治郎は『市民の図書館』が日本の公共図書館発展の基点に位置し, その安定的構造を支えているがために, 今日もお強い影響力・規範性をもつことを指摘した¹¹。山口は, 日本図書館文化史研究会が2010年(平成22)9月に開催したシンポジウム『「市民の図書館」40年』においても, (1)『市民の図書館』が社会保障的な性格を強調し, 知的自由の保障を重視したこと, (2)1960年代から70年代における農村社会から都市化社会への移行, あるいは「市民」の登場を的確に把握していたこと, (3)図書館サービスを戦略的に捉えたことの意義について, 再評価する必要性を主張した¹²。

1970年代は高度経済成長を背景に自治体税収が

伸びを見せ, 『中小レポート』や『市民の図書館』の議論も受けて, とくに都市部において公共図書館の整備が実現された時期である。松尾昇治はこの時期の東京都における図書館政策について, 政策形成の過程と実施方法に着眼しつつ論じている^{13,14}。東京都では1960年代に3つの図書館計画が検討され, これを土台としながら, 都立日比谷図書館長に杉捷夫を招聘したことを契機として, 区部と多摩地域への図書館設置が進んだ旨が論証された。

図書館サービスに関する研究を個別に見ると, とくに『市民の図書館』で重視された児童サービスの成果が目される。『児童図書館研究会50年史』(2004)が刊行され, 19世紀後半から現代までの児童サービスの展開がまとめられたほか, 汐崎順子が戦後日本の児童サービスの発展を検証している¹⁵。汐崎は文献・統計調査によりながら, 戦後を5つの時期に区分するとともに, インタビュー調査から小河内芳子ら中心的人物の人的ネットワークの重要性を明らかにした。また, 吉田右子は1960年代から70年代における「子ども文庫運動」の歴史的検討を行い, 石井桃子『子どもの図書館』(1965)の影響の大きさや, 母親の学びの場としての重要性を指摘した¹⁶。

2.2 占領期研究

1990年代後半以降, 戦後占領期に焦点化した継続的な研究成果が出され, 一次文書の検証が進んでいる¹⁷。そこでは, 連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)民間情報教育局(CIE)関係資料や米国国立公文書館(NARA), アメリカ図書館協会(ALA)所蔵資料などを用いて, 従来の日本側先行研究の上に米国の対日図書館政策を明らかにする視点がとられる。

根本彰が科学研究費補助金助成を受けた一連の研究を刊行しているほか¹⁸, 近年では, 中村百合子が戦後の学校図書館改革をテーマに博士論文を執筆し, 1948年(昭和23)に文部省から刊行され後年の学校図書館実践に強い影響を及ぼした『学校図書館の手引』の作成過程を中心に, 米国の影響についてまとめている¹⁹。学校図書館コンサルタントや図書館担当官ら米国側の意向を受けつつ, 深川恒喜をはじめ日本側の学校図書館関係者がこれと協働し, それによって学校図書館設置運動が推進された経緯が明らかにされた。

筆者も, 占領期中期のCIEの図書館政策について,

第2代図書館担当官バーネット (Paul J. Burnette) の活動を中心にまとめたほか²⁰⁾、1951年(昭和26)に図書館員養成機関としてジャパン・ライブラリースクールが開校した際、大きな影響力をもったCIE情報課課長ドン・ブラウン (Donald B. Brown) と日本の図書館との結びつきについて考察した²¹⁾。また、こうした占領期研究の延長線上には、米国の指導下に設置されたCIE図書館とそれを継承したアメリカ文化センター (ACC) を対象に、ACCの蔵書分析を通じて米国が日本にもたらそうとした理念の解明を試みた石原真理の研究がある²²⁾。

占領期研究においては、関係者へのインタビューを通じて、終戦直後の図書館運動の実態に迫ろうとする視点も有力である。たとえば、先の博士論文で中村が、芦谷清、鈴木英二ら当時の学校現場の関係者に聞きとりを行い、学校図書館改革の実相を明らかにしたほか、奥泉と小黒は、長野県下伊那郡上郷村の図書館運動を取り上げる中で、図書館が農村地域に深く定着し、青年たちが利用主体・運営主体として積極的に関わったことを説き明かした²³⁾。

CIE図書館に関しては、大阪CIE図書館を中心に職員による回顧録『CIE図書館を回顧して』(2003)が出版され、これをもとに大島真理がCIE図書館女性館長20名の略歴をまとめているほか²⁴⁾、1948年から84年にかけてCIE図書館やACC図書館に勤めた豊後レイコの記録も刊行されている²⁵⁾、²⁶⁾。

2.3 その他

川原亜希世と松崎博子は1950年(昭和25)の図書館法制定過程に関わり、同年に図書館法施行規則で定められた省令科目の成立背景を考察した²⁷⁾。先行文献調査に基づく再解釈が中心であるが、省令科目の成立には米国の占領政策が大きな影響を及ぼしたこと、また、文部省図書館職員養成所の開講科目や大学基準協会の図書館員養成課程基準も参考にされたことがまとめられている。

大学図書館に関する歴史的研究として、利根川樹美子は、戦後日本の大学図書館における司書職法制化運動の経緯を考察し、運動の意義と限界やその要因、焦点となった「大学図書館司書」の資格について論じている²⁸⁾。1950年代から60年代当時、大学図書館司書の資格内容や認定方法について検討が重ねられ、職員制度全体の改革が目指されるとともに、団体組織による継続的な運動形成が志向された点を

検証した。

学校図書館に関わり、今井福司は戦後新教育運動を展開した明石附小プランとそのモデルである米国バージニア州のプログラムを比較検討し、後者における多様な資料の活用重視の姿勢が、前者における資料活用能力の育成や図書館利用の提唱へとつながったことを明らかにした²⁹⁾。また、稲井達也は戦後の教育界で読書指導に力を入れた大村はまを取り上げ、大村が戦後早い時期から国語の授業で「単元『読書』」を開始し、のちの「読書生活指導」論へと結実したことを『二C読書新聞』など当時の一次史料をもとに論じている³⁰⁾。

このほか、安藤友張は、1950年代から60年代に公立学校に専任司書教諭を配置した愛知県・高知県・東京都・沖縄県の学校図書館政策について、当時の学校図書館関係者に対するインタビュー調査も交えて考察した³¹⁾。専任司書教諭の配置は地域ごとに多様性が見られたが、高知県の公立小学校・中学校を除き、専任司書教諭と学校司書の二職種併置という共通点があったこと、そして、校内の教員集団における「同僚性」の形成を阻害する一面の見られたことが検証された。

3. 人物への注目

人物に注目した研究は、時代・地域を問わずに盛んである。2.1～2.3で既述した汐崎、中村、稲井、筆者らの研究にも人物研究的要素はあったが、ここでは新たな史料を掘り起こしながら、図書館員や図書館関係者の思想や行動を、社会背景のもとで読み解くことが求められている。

日本図書館文化史研究会では2007年(平成19)、図書館発展に関わった図書館人の論文を公募・審査し、国内外の20名を取り上げた評伝集『図書館人物伝』が刊行された³²⁾。日本人篇では、秋田県立秋田図書館長時代の佐野友三郎や、大正末年から帝国図書館長を務めた松本喜一など、近代戦前期の図書館人に関する論稿4本に加え、戦前から戦後にかけて活躍した人物6名が取り上げられている。『日本十進分類法』の作成者として名高く、戦後は国立国会図書館や日本図書館協会で活動した森清、神戸市立図書館で戦後、レファレンス・ワークを実践した志智嘉九郎ら、多彩な人物がまとめられた。また、外国人編でも10名が取り上げられ、筆者も占領期初代図書館担当官キーニー (Philip O. Keeney) の

思想的特質を考察した。

単行書のほか、人物を論じた研究としては以下の文献がある。まず岩猿は、図書館史研究者として著名な竹林熊彦、小野則秋、永末十四雄という九州出身の3人を取り上げ、その履歴と図書館史研究における問題意識を評価している³³⁾。とりわけ、竹林においては時代背景への視野が狭いこと、また、小野においては図書館の歴史を生物史観（人間の本能という非歴史的概念）から解釈しようとしたことに、それぞれ限界があった点を厳しく断じた。

戦後の人物研究では、奥泉が『日本の参考図書』（1962）の執筆・編集に大きな役割を果たした森博を取り上げ、関係者へのインタビュー調査に基づき、森が静岡県立気賀町立図書館長だった1950年代の時期の思想をまとめている³⁴⁾。森は図書館をまちづくりの中心におき、貸出とレファレンスサービスを重視したことが検証された。

鈴木宏宗は国立国会図書館長・金森徳次郎の業績をまとめ、就任の経緯から、幹部職員の採用や一般の人びとへのPR活動、副館長・中井正一との確執、そして「春秋会事件」を契機とした辞任に至るまで、衆議院図書館運営委員会会議録などをもとに考察した³⁵⁾。

戦後の読書指導に大きな影響力を残した滑川道夫については、野口久美子と中村がそれぞれ個別に論じている。野口は、滑川の読書指導論に「読書に関する生活指導」（1940年代から50年代前半）と「読書による生活指導」（1950年代後半から70年代）の2つの観点があり、1950年代半ばを転機としながら、後者を重視する考えが徐々に明確化されたことを論証した³⁶⁾。一方、中村は1930年代後半に児童文化運動の広まりの中で読書指導への関心を深めた滑川が、『児童文化論』（1941）において本格的な理論形成に着手した点を重視している³⁷⁾。

戦中期では、ウエルトハイマーが移民一世の浅野七之助を取り上げ、浅野がトパーズ強制収容所内に日本語図書館を設立した経緯について論述した³⁸⁾。日系人が自由に読書・談話を行うことのできる「文化空間」の意義を論じた本稿は、戦争と図書館をめぐる新たな視座を提示している。

戦前・戦時期では、まず津村光洋が鳥取県立鳥取図書館時代の森清についてまとめている³⁹⁾。同館では主任司書・河野寛治の指導下で主体的な運営が行われており、職員誌「ふぐるま」の刊行を通じて森の図書館人としての基礎が形作られた旨を論じた。

森について米井勝一郎は、戦時下の華中鉄道図書館において、活発な図書館活動を通じて先進的な図書館実践を目指した点を述べている⁴⁰⁾。

福永義臣は、石川県における中田邦造の読書指導実践を取り上げ、図書を教育の手段ではなく自己教育における教育者であると規定した中田の主張を検討し、さらに、中田が戦時期に翼賛政治に積極的に協力したとする通説へのアンチテーゼを提唱した⁴¹⁾。中田については、鞆谷純一も満州開拓地読書運動における中田の活動に焦点を当てつつ、それが指導者養成の失敗によって頓挫した経緯を克明に描いている⁴²⁾。

福永は、文部省の通俗教育主任官として社会教育を振興した乗杉嘉壽の図書館思想についても、その主著『社会教育の研究』（1923）などをもとに考察した⁴³⁾。乗杉については、先述の『図書館人物伝』の中で、坂内夏子が図書館員養成を中心に論じている⁴⁴⁾。米国の教育思想に強く影響を受けた乗杉が、図書館利用を通じて人びとの読書力を高め、自ら考えて行動する人間の養成を目指した点が述べられている。

山梨あやは、1900年代から60年代日本の教育政策における読書の位置づけを論証する中で、乗杉の図書館思想や、東京市立図書館を主導した今澤慈海の図書館実践について検討している。山梨は今澤の図書館観について、「生涯的教育」機関として社会民衆の読書趣味を涵養することをその使命とし、「利用者本位」の立場から人びとの嗜好に応じた読書機会の提供を図ったことを論じた⁴⁵⁾。

このほか、明治・大正期の人物研究では、鞆谷が大正時代に徳島県三好町に三好婦人図書館を設立した高津半造を取り上げ、その婦人教育観・図書館観について、三好町の風土の特色に言及しながら、丹念な筆致で論じた⁴⁶⁾。良妻賢母思想に基づく婦人図書館の創設とその運営理念について、大正自由教育という風潮の中に位置づけている。また、長尾宗典は、図書館理念を支える「文化」を議論の俎上に載せ、1923年（大正12）の関東大震災後に東京帝国大学附属図書館長を務めた姉崎正治の思想を検証しながら、彼の主張した「文化主義」が当時の館界で独自の位相を占めていたことを論じた⁴⁷⁾。

中林隆明は、明治時代初期の文部行政に影響力をもった田中不二麿の図書館観について再検討している⁴⁸⁾。田中については筆者も、米国セントルイス教育長ハリス（William T. Harris）の総合的教育思想

の影響のもとで田中が、学校制度の整備と「公共書籍館」設置とを“主伴ノ関係”と規定し、人びとの継続的な学習を保障する機関として「公共書籍館」振興への熱意を示した点を論じた⁴⁹⁾。

また、宮崎真紀子は、日本人として最初に米国のライブラリースクールで正規の学生として卒業した加藤花子らを取り上げ、渡米から卒業、帰国に至る経緯を明らかにした⁵⁰⁾。

総じて人物研究においては、当人ないしは関係者へのインタビュー調査や、当人が活躍した当時の一次史料の掘り起こしが積極的に進められている。

4. 個別研究の成果

上記3つの特色に基づいた研究以外にも、時代ごとに焦点化した個別研究や一館史などが数多く発表されている。ここではそのうち主要な成果に触れておく。

時代別の研究動向を見ると、前近代よりも近代以降の日本を対象とした研究に厚みがある。戦前・戦時期の図書館についての研究成果としては、東條文規が図書館界の戦争責任を論じている⁵¹⁾。東條は日本図書館協会を中心とする図書館関係者が、大正・昭和天皇の大礼や紀元二千六百年祝典などの国家的慶事を利用し、皇室の威光を借りるかたちで図書館政策の充実を図った点を強く批判した。また、小黒は長野県上田市立上田図書館に保存される図書館日誌を用いて、1925年（大正14）以降の図書館統制を検証している⁵²⁾。1930年代から統制が強化され、1940年代になると出版物の発売禁止処分が苛烈化したことを明らかにした。

岡村敬二は蔵書に着目し、「満洲国」図書館をはじめ、日本語資料を所蔵してきた機関で編纂・出版された蔵書目録・資料目録の類を一覧化したほか、「満洲国」に集められた資料のうち、戦後、中国に残されたものの変遷過程を年表化してまとめた⁵³⁾。また、榎谷は日本軍が中国占領地で行った図書の接收をテーマに博士論文を執筆し、これを刊行している⁵⁴⁾。盧溝橋事件以降の中国占領地における図書接收活動や、現地での整理と活用、国内への発送、敗戦後の図書返還問題といった一連の歴史的事実が明らかにされた。

和田敦彦は、米国の大学図書館や研究機関に存在する日本語の書物が、そこに所蔵されるに至った来歴をテーマに論じている^{55), 56)}。和田は米国議会図書

館をはじめ50以上の図書館・文書館で聞き取りや受入記録の検討を行い、そこに関わった人や組織の問題意識を浮かび上がらせた。戦前期の日本語蔵書の構築のされ方、戦後占領期のプランゲ文庫のようなコレクションの作られ方に加え、米国内における日本語教育についても考察し、「リテラシー史」という新たな領域を開いた。

高梨章は、戦前・戦時期の日本のリテラシーの程度を検証し、そうしたリテラシーの相違が図書館利用者層とどのように関連したかを考察している⁵⁷⁾。尋常小学校のみ卒業の者や郡部居住者、農業従事者、女性、壮・老年層の読み書き能力は概して低く、リテラシーの高低が図書館利用に直結したこと、また、人びとの人格修養の向上に寄与する立場から、図書館が娯楽書提供に乗り出すことは至難であり、利用者のリテラシー向上を直接指導できる立場にはなかったことが述べられた。

20世紀初頭を扱った研究では、篠原由美子が聞き取り調査と文献調査から長野県上田市の小牧普通図書館の実態をテーマに、設立趣旨や背景、運営・利用状況、図書整理方法についてまとめているほか⁵⁸⁾、小黒は、同じく長野県の下伊那郡千代村立千代図書館を取り上げる中で、当初は村の青年たちの自主的な運営が認められていたものの、図書館令改定と前後して長野図書館からの思想取締りが強化され、「優良図書館」として表彰されるに至った経緯を批判的に考察した⁵⁹⁾。

また、吉田昭子は、1908年（明治41）に設立された東京市立日比谷図書館の設立構想とその経緯について、当時の雑誌、新聞、公文書類や「日比谷図書館建築仕様書」など一次史料をもとに考察し、市民のための通俗図書館を目指す理念が存在したことを明らかにした⁶⁰⁾。吉田はまた、同館の設立に尽力した坪谷善四郎関係資料（新潟県加茂市立図書館所蔵）を調査し、これまで紹介されてこなかった坪谷の自筆日記、雑稿類、加茂町立図書館寄贈台帳、回顧録など、その全容を整理している⁶¹⁾。

館種別には、とりわけ近代以降の大学図書館史の分野において、近年、顕著な研究上の進展が見られる。まず、高野彰が東京大学附属図書館所蔵の未整理文書をもとに、帝国大学図書館成立以前の図書館活動を考証した⁶²⁾。高野は、前史となる東京開成学校では生徒へ貸し出す教科書（副本）の置場が図書館であったが、法律書庫の設置とともに図書館の重要性が認識されるようになり、東京大学では学部連

合体の各学部には図書館が設置されたこと、そして、図書館は事務部門の中で独立した機関であったことを論じた。

当時の大学図書館の位置づけについては、河村俊太郎が東京帝国大学文学部心理学研究室の蔵書を経年的に分析し、世界的な学問の潮流や、学科・講座の構成員の関心とその構成に大きく影響したことを考察している⁶³。河村はまた、東京帝国大学図書館に置かれた図書館商議会の運営状況を考察する中で、有力な部局が中央図書館を統制する側面の強かったことを明らかにした⁶⁴。呑海沙織は、大正期の私立大学図書館の認可要件を規定する「大学設置認可規定(秘)」に基づき、多くの私立大学が設置認可時にこの要件を満たさなかった点を明らかにし、大学令が私立大学図書館の礎を築いたと述べた⁶⁵。

図書館学領域の単行書・学術雑誌を見る限り、前近代の研究の数は決して多くない。そのうち近世期に関して高倉一紀は、竹口家蔵書の蔵書構成を分析する中で、竹川竹斎の地域民衆へのまなざしこそが公開文庫設立の原動力であったと見なし、近世蔵書家研究の中に射和文庫を捉え直したほか⁶⁶、伊勢の蔵書家・堀内広城の蔵書分析を通して、近世学芸の享受者であるとともに中継者でもあった知識人の活動実態を考察している⁶⁷。

また、小川徹は、日本における図書館の起源に関する考察を試み、法隆寺金堂の釈迦三尊像の台座解体修理作業の中で見つかった「書屋」について、7世紀の推古朝もしくは天武朝の成立になったものかと推定している⁶⁸。

おわりに

以上、日本図書館史に関する研究動向を見てきた。方法論的な問い直しや戦後の時期への評価が試みられるとともに、インタビューや史料に基づく人物研究が活発化している点に特色があることを指摘し、それ以外の個別研究の成果も取り上げた。奥泉の指摘するように、“図書館史研究は、公刊された資料だけに頼っていた時期から、一次資料の活用、もしくはこれまで明らかにされていない史料を採求する時期へと移って”きている⁶⁹。

ここでは最後に、日本図書館史研究の比較視座を提示するものとして、日本における米国図書館史の研究成果と読書史の知見について、若干言及しておきたい。

米国図書館史の研究では、京都図書館情報学研究会から精力的に翻訳研究を発表してきた川崎良孝が、戦後の研究の流れを体系的に整理している。川崎は2011年(平成23)、吉田右子との共著『新たな図書館・図書館史研究：批判的図書館史研究を中心にして』において、米国の図書館史研究がシェラ(Jesse H. Shera)、ディツィオン(Sidney Ditzion)、ハリス(Michael Harris)、ギャリソン(Dee Garrison)ら、先行する研究世代の問題意識や視点、解釈、さらには周辺諸学の視点や方法を視野に入れながら、個別的な領域で歴史を再構成する方向に向かっていると指摘する⁷⁰。そして、従来の図書館史の捉え返し、女性などマイノリティの視点、さらにはいわゆるブック・カルチャー、プリント・カルチャーといった幅広い領域の中に図書館史を位置づけることが、近年の顕著な特質であることを論じた。

また、読書史の成果では、西洋と日本において人びとが本を読む姿を描いたさまざまな絵画を取り上げ、文化装置としての本が果たした役割について考察した『文読む姿の西東』(2007)が刊行された⁷¹。同書では10編の論文が編まれ、本を読む行為、対象としての本、絵を描く画家の三者のダイナミズムが「読書の情景」のもとで読み解かれている。日本の読書画像については、石川透が日本に現存する最古の読書画像として『源氏物語絵巻』を指摘し、また、長友千代治は、江戸時代における「読書する女」が初期の上流女性から中期以降は中流女性へと広がりを見せ、娯楽読物も登場するようになった点を時代背景と合わせて検証している。

こうした米国など海外における研究手法に学び、プリント・カルチャーや読書史をはじめとする周辺領域の視座、研究成果を横断的に活用することは、今後ますます、日本図書館史の研究においても重要視されるようになると思われる。

注・引用文献

- 1) 三浦太郎「[研究文献レビュー] 図書館史」『カレントアウェアネス』no.297, 2008, p.14-19.
- 2) 「図書館文化史研究の回顧と展望：日本図書館文化史研究会20周年記念シンポジウム(2002年9月15日アルカディア市ヶ谷)」『図書館文化史研究』no.20, 2003, p.1-63.
- 3) 岩猿敏生『日本図書館史概説』日外アソシエーツ, 2007, 248p.
- 4) 河井弘志「[特別講演] 図書館史と図書館思想史と図書館学史：日本図書館文化史研究会2004年度研究集会・総会(2004年9月11日 京都精華大学)」『図書館文化史

- 研究』no.22, 2005, p.1-27.
- 5) 「図書館史研究にとってエビデンスとは何か？」エビデンススペースアプローチによる図書館情報学研究の確立 第5回ワークショップ(2007年7月28日 慶応義塾大学) [http://www.jslis.jp/eba/workshop/5/event070728_1.html] (最終アクセス日: 2012年1月30日)
 - 6) 奥泉和久『近代日本公共図書館年表 1887-2005』日本図書館協会, 2009, 467p.
 - 7) 奥泉和久『図書館史研究をどう進めるか』『現代の図書館』vol.48, no.2, 2010, p.103-108.
 - 8) 「[シンポジウム] 戦後公共図書館実践の再検証: 日本図書館文化史研究会 2004年度研究集会・総会(2004年9月11日 京都精華大学)」『図書館文化史研究』no.22, 2005, p.29-72.
 - 9) 小川徹ほか『公共図書館サービス・運動の歴史 1: そのルーツから戦後にかけて』(JLA 図書館実践シリーズ4) 日本図書館協会, 2006, 266p.
 - 10) 小川徹ほか『公共図書館サービス・運動の歴史 2: 戦後の出発から現在まで』(JLA 図書館実践シリーズ5) 日本図書館協会, 2006, 276p.
 - 11) 山口源治郎『市民の図書館』の歴史的評価をめぐって: 誌上討論『現代社会において公立図書館の果たす役割は何か』を振り返る』『図書館界』vol.59, no.5, 2008, p.308-313.
 - 12) 山口源治郎「[シンポジウム]『市民の図書館』と公共図書館の戦後体制: 日本図書館文化史研究会 2010年度研究集会・総会(2010年9月11日 実践女子大学)」『図書館文化史研究』no.28, 2011, p.31-47.
 - 13) 松尾昇治「東京の公共図書館政策の一考察: 1970年代における美濃部都政の図書館政策(1)」『図書館界』vol.57, no.6, 2006, p.344-356.
 - 14) 松尾昇治「東京の公共図書館政策の一考察: 1970年代における美濃部都政の図書館政策(2)」『図書館界』vol.58, no.1, 2006, p.2-21.
 - 15) 汐崎順子『児童サービスの歴史: 戦後日本の公立図書館における児童サービスの発展』創元社, 2007, 213p.
 - 16) 吉田右子「1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討」『日本図書館情報学会誌』vol.50, no.3, 2004, p.103-111.
 - 17) 1990年代後半から2000年代前半までの占領期図書館史研究の動向については、三浦太郎「日本の戦後公共図書館史: 戦後占領期を中心に」三田図書館・情報学会編『図書館・情報学研究入門』勁草書房, 2005, p.138-141. を参照されたい。
 - 18) 研究代表者・根本彰『戦後教育文化政策における図書館政策の位置づけに関する歴史的研究(占領期図書館研究第3集) 東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室, 2005, 127p. 同報告書としては、このほか、第1集『占領期図書館研究の課題』(1999)、第2集『戦後アメリカの国際的情報文化政策の形成』(2001)が出されている。
 - 19) 中村百合子『占領下日本の学校図書館改革: アメリカの学校図書館の受容』慶応義塾大学出版会, 2009, 394p.
 - 20) 三浦太郎「占領下日本におけるCIE第2代図書館担当バーネットの活動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol.45, 2005, p.267-277.
 - 21) 三浦太郎「CIE情報課長ドン・ブラウンと図書館: 図書館員養成との関わりを軸に」『明治大学図書館情報学研究』no.2, 2011, p.28-37.
 - 22) 石原真理「横浜アメリカ文化センター所蔵資料と設置者の意図」『日本図書館情報学会誌』vol.56, no.1, 2010, p.17-33.
 - 23) 奥泉和久・小黒浩司「戦後復興期における上郷図書館の民主化運動をめぐって」『図書館界』vol.55, no.3, 2003, p.158-167.
 - 24) 大島真理「CIE図書館の女性図書館員たち」『図書館界』vol.56, no.4, 2004, p.224-235.
 - 25) 豊後レイコ『あるライブラリアンの記録: レファレンス・CIE・アメリカンセンター・司書講習』女性図書館職研究会, 2008, 54p.
 - 26) 豊後レイコ『あるライブラリアンの記録・補遺: 写真と資料で綴る長崎・大阪CIE図書館から大阪ACC図書館初期まで』女性図書館職研究会・日図研図書館職の記録研究グループ, 2010, 59p. このほか、豊後レイコ『八八歳レイコの軌跡: 原子野・図書館・エルダーホステル』ドメス出版, 2008, 258p. にもCIE図書館に関する言及がある。
 - 27) 川原亜希世・松崎博子「省令科目の成立に影響を与えた諸要因について」『特集・第52回研究大会グループ研究発表』『図書館界』vol.63, no.2, 2011, p.148-155.
 - 28) 利根川樹美子「大学図書館の司書職法制化運動: 昭和27年(1952)~40年(1965)」『日本図書館情報学会誌』vol.56, no.2, 2010, p.101-123.
 - 29) 今井福司「コア・カリキュラム運動に見られる資料を活用した教育」『日本図書館情報学会誌』vol.54, no.3, 2008, p.188-203.
 - 30) 稲井達也「大村はまの読書指導に関する研究: 戦後初期における単元『読書』と『読書新聞』の実践」『図書館界』vol.61, no.4, 2009, p.246-264.
 - 31) 安藤友張「1950-60年代の日本における専任司書教諭の配置施策」『日本図書館情報学会誌』2009, vol.55, no.3, p.172-194.
 - 32) 日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝: 図書館を育てた20人の功績と生涯』日外アソシエーツ, 2007, 457p.
 - 33) 岩猿敏生「九州と三人の図書館史家: 竹林熊彦, 小野則秋, 永末十四雄」『図書館学』no.93, 2008, p.1-12. 岩猿には、東京帝国大学で初めて図書館学を講じた和田万吉に関する論考もある(「和田万吉と東京帝国大学附属図書館の改革」『図書館学』no.99, 2011, p.1-6).
- 西日本図書館学会の機関誌『図書館学』には人物研究の発表も多く、本文中で言及する文献以外にも、開明的図書館人・佐野友三郎、20世紀前半に山口県明木村立図書館で活躍した伊藤新一、明治・大正期に私立福岡図書館を設立・運営した廣瀬玄銀、戦前に「出納所論」を唱えた田村盛一らが論じられている。
- 34) 奥泉和久「森博 図書館実践とその思想: 静岡県気賀町立図書館時代の活動を中心に」『特集・第52回研究大会グループ研究発表』『図書館界』vol.63, no.2, 2011, p.186-195.
 - 35) 鈴木宏宗「国立国会図書館長としての金森徳次郎」『図書館文化史研究』no.21, 2004, p.57-76.
 - 36) 野口久美子「滑川道夫読書指導論の特徴に関する一考察」『日本図書館情報学会誌』vol.54, no.3, 2008, p.164-187.
 - 37) 中村百合子「滑川道夫の読書指導論の形成: 戦前から戦後へ」『日本図書館情報学会誌』vol.54, no.3, 2008, p.204-221.

- 38) アンドリュー・ウェルトハイマー「アメリカの強制収容所内での文化空間の創造：浅野七之助とトパーズ日本語図書館 1943-1945」『日本図書館情報学会誌』vol.54, no.1, 2008, p.1-15.
- 39) 津村光洋「森清と草創期の鳥取県立鳥取図書館：1931～1934年を中心に」『図書館文化史研究』no.24, 2007, p.75-95. 津村は、鳥取県立図書館の草創期における郷土の人びとの関与について、『図書館の屋根の下で：戦前の県立鳥取図書館をめぐる人々』(2009)にまとめている。
- 40) 米井勝一郎「[研究ノート] 華中鉄道図書館：森清(もり・きよし)の上海時代」『図書館文化史研究』no.23, 2006, p.87-107.
- 41) 福永義臣『図書館社会教育の実践：中田邦造の読書指導と自己教育論』中国書店, 2006, 257p.
- 42) 鞆谷純一「[研究ノート] 満州開拓地読書運動：中田邦造を中心に」『図書館文化史研究』no.24, 2007, p.97-119.
- 43) 福永義臣「乗杉嘉壽の研究：セルフ・メード・マンを中心に」『図書館学』no.91, 2007, p.20-34.
- 44) 坂内夏子「図書館員教習所設置の意義」『図書館人物伝』(前掲32)の文献 p.23-46.
- 45) 山梨あや「近代日本における読書と社会教育：図書館を中心とした教育活動の成立と展開」法政大学出版社, 2011, 362p.
- 46) 鞆谷純一「三好高等学校『夫人図書館』：学校図書館の先覚者・高津半造」『図書館文化史研究』no.23, 2006, p.53-85.
- 47) 長尾宗典「一九二〇～三〇年代における『文化主義』と図書館：姉崎正治による東京帝国大学附属図書館再建をめぐる」『史境』no.63, 2011, p.19-35.
- 48) 中林隆明「[研究ノート] 明治初期の図書館行政と田中不二麿：岩倉米政使節団との関連において」『東洋英和女学院大学』人文・社会科学論集 no.22, 2004, p.77-95.
- 49) 三浦太郎「明治初期の文教行政における図書館理解：「公共書籍館」理念の成立をめぐる」『青山学院大学教育学会』教育研究』vol.53, 2009, p.83-112.
- 50) 宮崎真紀子「[研究ノート] 日本最初的女性図書館学留学生」『図書館文化史研究』no.24, 2007, p.121-138.
- 51) 東條文規『図書館の政治学』青弓社, 2006, 250p.
- 52) 小黒浩司「戦前期図書館統制の研究：上田市図書館『日誌』を読む」『図書館界』vol.61, no.3, 2009, p.174-184.
- 53) 岡村敬二『満洲国』資料集積機関概観』不二出版, 2004, 256p. 岡村は『満洲国出版目録』全8巻(2008)を編集している。また『満洲国』関連では、大場利康が『満洲国』で構想された理想の国立図書館像をテーマに論じたほか(「満洲帝国国立中央図書館籌備処の研究」『参考書誌研究』no.62, 2005, p.1-186.)、村上美代治が『満鉄図書館史』(2010)を著し、南満洲鉄道株式会社に設置された「満鉄図書館」の展開をまとめている。植民地図書館に関する研究は、近年広がりを見せており、ほかにも、小林昌樹が満鉄・京城図書館長を務めた林靖一の略伝を記すなど(「外地で活躍した図書館人・林靖一：略伝と著作一覧」『参考書誌研究』no.69, 2008, p.42-55.)、一定の研究成果がある。
- 54) 鞆谷純一『日本軍接収図書：中国占領地で接収した図書の行方』大阪公立大学共同出版会, 2011, 241p.
- 55) 和田敦彦『書物の日米関係：リテラシー史に向けて』新曜社, 2007, 406p.
- 56) 和田敦彦『越境する書物』新曜社, 2011, 368p.
- 57) 高梨章「図書館と大衆：そのリテラシー問題(昭和戦前・戦時期)」『図書館界』vol.62, no.3, 2010, p.206-220. 図書館利用者に関連して、伊東達也は「学歴」に対する社会的受容が増大した明治末期から大正にかけて図書館数も増加した結果、図書館が学生の「勉強室」として認知され、それが公共図書館の運営原理に組み込まれるようになった点を指摘している(「受験勉強と公共図書館(1)：“上京遊学”と図書館の利用」『図書館学』no.87, 2005, p.27-37., および「新聞・雑誌にみる明治・大正期の受験生の図書館利用」『図書館学』no.92, 2008, p.10-22.)。
- 58) 篠原由美子「[研究ノート] 小牧共立普通図書館(長野県上田市)設立の事情とその実態」『図書館文化史研究』no.20, 2003, p.79-107.
- 59) 小黒浩司『優良図書館』の誕生：長野県下伊那郡千代村立千代図書館の歴史』『図書館界』vol.55, no.5, 2004, p.234-245.
- 60) 吉田昭子「東京市立日比谷図書館構想と設立経過：論議から開館まで」『三田図書館・情報学会』Library and Information Science』no.64, 2010, p.135-175.
- 61) 吉田昭子「加茂市立図書館坪谷善四郎関係資料とその意義」『三田図書館・情報学会』Library and Information Science』no.62, 2009, p.145-165.
- 62) 高野彰『帝国大学図書館成立の研究：明治初期東京大学法文学部図書館史』(改訂増補版) ゆまに書房, 2006, 470p.
- 63) 河村俊太郎「蔵書構成の分析から見た東京帝国大学文学部心理学研究室図書室の研究補助機能」『日本図書館情報学会誌』vol.54, no.4, 2008, p.223-240.
- 64) 河村俊太郎「図書館商議会の運営からみる東京帝国大学図書館の中央と部局の関係」『日本図書館情報学会誌』vol.56, no.3, 2010, p.131-146.
- 65) 呑海沙織「大正期の私立大学図書館：大学令下の大学設置認可要件としての図書館」『日本図書館情報学会誌』vol.56, no.1, 2010, p.1-16.
- 66) 高倉一紀「射和文庫の蔵書構築と納本：近世蒐書文化論の試みⅠ」『図書館文化史研究』no.24, 2007, p.37-74.
- 67) 高倉一紀「堀内広城の国学：近世蒐書文化論の試みⅡ」『皇學館大学紀要』vol.48, 2010, p.128-160.
- 68) 小川徹「日本最古の図書館『書屋』について」『図書館文化史研究』no.19, 2002, p.33-45.
- 69) 前掲7)
- 70) 川崎良孝・吉田右子『新たな図書館・図書館史研究：批判的図書館史研究を中心にして』京都図書館情報学研究会, 2011, 402p.
- 71) 田村俊作編『文読む姿の西東』慶應義塾大学出版会, 2007, 218p.